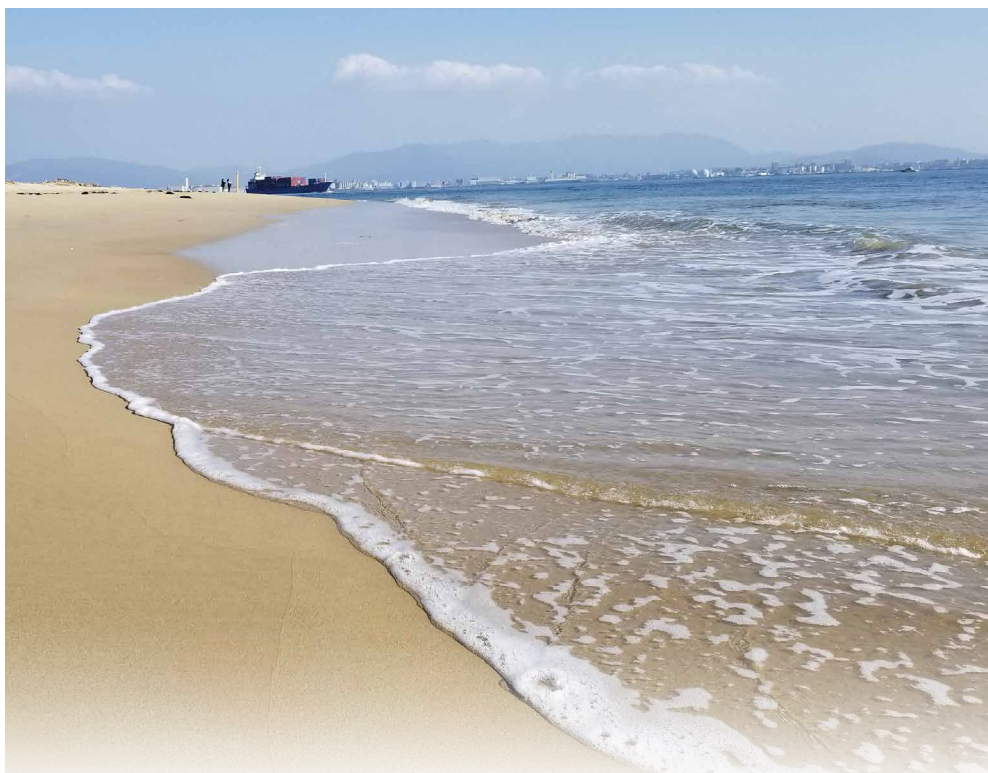


News Letter



福岡の海は、荒波が押し寄せる玄海灘側と穏やかな博多湾内で環境が異なり、生物相も変化する。写真は博多湾内の海岸。白い砂が美しい鳴き砂の浜に、夏はコアジサシが飛来する。

巻頭エッセイ

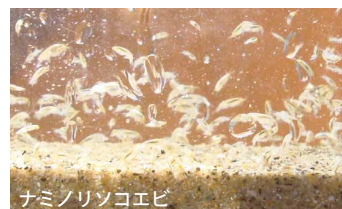
砂浜で出会える生きものたち

日本は周囲を海に囲まれた島国で、私たちにとって砂浜はかけがえのない存在です。海から陸へと続く砂浜の緩やかな移行帯は、海からの風や波がもたらす影響によって特異な環境となっており、植物、昆虫、鳥をはじめとした多様な生きものが暮らしています。生きものたちは、潮の満ち引き、強い日差しや潮風など砂浜の環境に適応し、微妙なバランスの上に特異な生態系を作り上げています。

砂浜や干潟は食糧を得ることができる身近な場所でもあり、私たちは、魚を釣る、貝類を採る、海藻を摘むなど、その豊かな恵みを受けて生活をしてきました。しかし、埋め立てや開発工事、海岸の浸食等の影響によって砂浜は失われつつあり、さらに地球温暖化による影響が砂浜の消失の要因のひとつとなると考えられています。IPCC 第5次評価報告書によると、地球温暖化等により21世紀末までに世界の海面は26

～82cm上昇する可能性があると言われており、これによって砂浜の46～91%が消失する可能性があると予測されています。砂浜は、多様な生きものが訪れ、出会う場所です。食べる・食べられるという命のつながりのもと、特異な生態系が成り立っており、絶滅の危機に瀕する希少な生きものも暮らしています。美しい砂浜を守るために、できることを一緒に考えてみませんか。

(九州支社 営業担当 小山内 朝香)



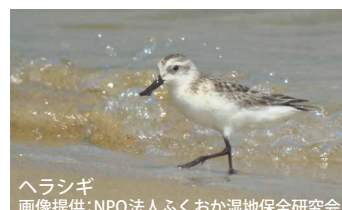
ナミノリソコエビ

波打ち際に生息する小さな甲殻類の仲間。福岡では博多湾内の砂浜に生息しており、渡り期のシギ・チドリ類の重要な餌となる。



ハマウスボ

海岸や河原などの砂地に生育する葉緑素を持たない寄生植物。カワラヨモギ（写真の左側の植物）などに寄生する。



ヘラシギ

画像提供: NPO法人ふくおか湿地保全研究会

個体数が激減し、世界に240～456羽程度しかいないとされている（環境省RDB：絶滅危惧ⅠA類）。夏にロシアで繁殖し、日本へは春と秋の渡り期に訪れる。写真は波打ち際に餌を食べているところ。ミヤンマー、バングラディシュなどで越冬する。

- 参考文献：海面上昇による全国の砂浜消失将来予測における不確実性評価（有働恵子、武田百合子／東北大学災害科学国際研究所）
■参考HP：IUCNレッドリスト <https://www.iucnredlist.org/species/22693452/134202771>
■資料提供：砂浜の生きものたち（NPO法人ふくおか湿地保全研究会）

目次

エッセイ	砂浜で出会える生きものたち	1	連載漫画	びっくり！目からウロ子ちゃん	7
会社紹介	写真とイラストで振り返る ちいかん40年の歩み	2	ある日の フィールドノートから	花以外から見る 植物の色々な調べ方	8
インタビュー	いきもの好きの履歴書 vol. 4	4			

写真と
イラストで
振り返る

chiikan history ちいかん40年の歩み

ちいかんは本年、設立40周年を迎えました。

これまで当社を支えてくださいましたお客様、ご指導いただきました先生方、金融機関やその他取引先のみなさま、OB・OG、ご家族のみなさまにも心より感謝いたします。

当社が歩んできた歳月を、自然環境問題や当社をとりまくさまざまな出来事、たくさんの写真、様々な業務をはじめとして本紙やちいかんカレンダー等へ生きものと人のかかわりを精緻に表現していただいている飯塚要氏のイラストなどで振り返ります。

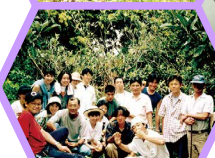
創業から数年間は人数も少なく、大学を出たの若いスタッフが大半でした。大学の研究室のような雰囲気がありました。



技術本部 大阪支社



本社 / 東京グループ



技術本部 北海道支社



技術本部 東北支社・野生生物管理部 東北オフィス



技術本部 九州支社



技術本部 名古屋支社

「生きものを調べる - 北から南まで -」飯塚要 2009年カレンダー (部分)

「里山の水辺をのぞいてみたら」飯塚要 2007年カレンダー (部分)



■ 東京都世田谷区用賀に「有限会社地域環境計画コンサルタント」を設立。 1981

閣議決定による要綱アセス (84)
リゾート法 (87)

■ 大阪支社開設 1990

地球サミット、気候変動枠組条約、
生物多様性条約採択 (92)
種の保存法、環境基本法 (93)

■ 「株式会社地域環境計画」に改組。 1994

■ 世田谷区桜新町へ本社移転

■ ちいかん News Letter 創刊 1995

阪神淡路大震災、生物多様性国家戦略 (95)

■ 建設コンサルタント登録 1996

京都議定書採択、河川改正法 (97)
NPO 法、温暖化対策推進法 (98)
環境影響評価法 完全施行 (99)

■ 北海道支社開設 2000

■ 拠点間の分野別技術交流が活発に

循環型社会形成促進基本法 (00)

■ 東北分室 (現・東北支社) 開設 2002

自然再生推進法、
ヨハネスブルグサミット (02)

■ 九州支社開設 2004

■ NPO 法人 野生生物調査協会 設立

■ ちいかん年間カレンダー制作開始
(イラスト：飯塚要氏)

■ ISO9001 : 2000 東京本社登録
(現在は BS EN ISO9001 : 2015
東京グループ登録) 2005

■ 名古屋事務所 (現・名古屋支社) 開設 2006

生物多様性基本法 (08)

■ 鳥獣被害対策用品の EC サイト
鳥獣被害対策 .com 開設 2010

生物多様性条約締結国会議 COP10 (10)



- 東京支社を廃止し技術本部を設置。
配下へ自然環境研究部・環境共生
推進部、地方各支社を配置。

※年表の記述は取り組みの開始時期等を表しており、
写真撮影年とは一致しない場合があります。
※本社、全国各支社の社屋は現在のものです。

コロナ禍下においてこれまでを振り返りますと、
働く仲間が交流しながら高め合い、新しい事物を
生み出していくことの大切さをより一層痛感します。

このような状況下ではありますが、当社では、
様々な対策を行い、滞りなく業務を遂行できるよう

万全を期して対応させていただいております。

今後とも、変わらぬご愛顧を賜りますよう、何卒
よろしくお願い申し上げます。

株式会社地域環境計画 代表取締役 高塚 敏
社員一同

生きものとの出会いや、現在の仕事に対する姿勢など。
ちいかん社員の普段は聞けない「あんな話」や「こんな話」、ちょっとだけ探ってみましょう！

いきものの好きの履歴書 VOL.4

——上村さんは入社7年目ですが、入社後しばらくは主に植物技術者として調査が主なお仕事でした。今はどういった事をされていますか？

はい、植物技術者として現地調査に出る事は今もありますが、自治体や民間企業の生きものに関わる様々な取り組みに対するコンサルティングが主な業務になります。それぞれの業務によって内容は変わりますが、共通するのはお客様と相談しながらやるべきことを見出して、業務を形作っていくことですね。

——なるほど。お仕事をするうえで気をつけていることはありますか？

お客様との信頼関係の構築は、どの業務でも一番気をつけています。

と言っても、特別なことはしてなくて、お客様と頻繁にコミュニケーションをとって、お客様は何を求めているのか、何に困っているのかをいつも考えて適切な提案を心掛ける、しっかりとデータを積み重ね、正確な成果として提出する、その繰り返しだと思います。

お客様との信頼関係を元に何かを作り出すという仕事は、植物を調査することと同じくらい魅力的でワクワクします。

——元々植物や生きものに興味があったんですか？

小さい時に父親に連れられて近所の山へハイキングに行ったことはありましたが、虫取りをしたり、野山を駆け回って遊んだ…という経験はほぼありません。生きものや自然環境との出会いは、大学で「生態学」の講義を受講したことがきっかけです。

その頃、私の所属していた大学で、今村彰生先生という方が教鞭を取っておられました。厳格な講義をされる方でしたが、内容が抜群に面白くて、その後も生態学系の講義を中心に選択するようになりました。今考えると私の人生を方向づけた、衝撃的な出会いでしたね。

——なるほど！衝撃的な出会い（笑）



Shinpei Uemura ● 2015年に植物技術者として入社。現在、大阪支社生物多様性推進室で活躍中。
植物関連の業務全般をこなすが、とりわけ都市域における緑地の生物多様性保全を得意としている。

「生きものを通じて社会をより良く」を
常に念頭において仕事をしています。

大阪支社 生物多様性推進室
主任 上村 晋平

今まで認識していなかったけど、身の回りにはこれほどたくさんの生きものがいて、それぞれ何かしらの「戦略」を持って、命を繋いでいる…そんなことに、純粋に「生きものってすごい！面白い！」と感じました。

また「環境」とは何か、「生物多様性」とは何なのかを問われて、自分で深く考えるような機会もあり、これまで知らなかった概念に触れ、引き込まれました。

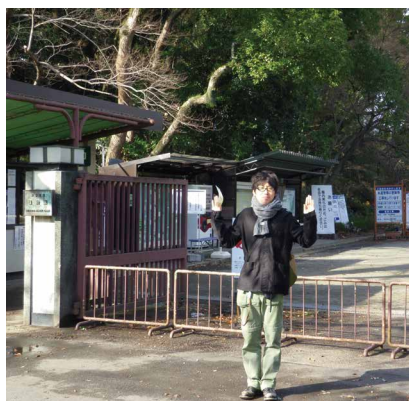
毎回生きものに関わる新しい考え方や体験があり、講義を楽しみにしていました。お話しする時は緊張しましたが、必死でついていった感じです。私の環境、生物多様性に対する考え方、捉え方のコアの部分は、大学での講義や先生とのやり取りの中で形作られたと思います。

——学生頃から地域環境計画の事はご存知だったんですか？

はい、最初に地域環境計画、ちいかん、という名前を知ったのは、大学3、4回生の頃です。研究室に、ちいかんの社員さんが2人連れ立ってヒアリングに来られたんです。そこで会社のことを少し紹介してもらいました。後で自分でも調べたのですが、当時は「環境コンサルタント」の存在をほとんど知らず、生きものや自然環境調査を仕事にしている会社があることに衝撃を受けました。

でも学部生のときは研究を続けたいという事で就活せず、大学院に進んだのですが、なんとなくちいかんの存在は頭の片隅にありました。

——実際に就職先として選んだきっかけはなんだったんでしょう。



大学生時代の上村氏

私はその頃、草本植物と団地(!)が好きで(笑)、修論で「住宅団地内の緑地に残された里山の草地」をテーマに研究していたんですが、研究に取り組むうちに、自然環境を「開発」するか「保護」するかの二項対立となるのではなく、生きものと共生する社会づくりに将来関われたらと考えるようになりました。その時調べたちいかんのホームページに「生きものと共生する地域づくり・人づくり」という言葉を見つけて、それを見た瞬間「あ、ここだ！」という感じでピンとききました。きっとこれまで自分が学んだことを活かして、かつ、やりたい仕事ができる会社なのではないかと思いました。

——第二の衝撃の出会いだったんですね。

確かにそうかもしれません(笑)。

——実際に地域環境計画で働いてみて、いかがでしたか？

入社して1、2年目は常にピンチだった気がします(笑)。とにかく学生時代には経験したことがない種類の作業、量、緊張感で、純粋な現地調査が一番リラックスして取り組めたくらいです(笑)。特に、入社して最初に担当した業務はとても大変でした。権威のある先生にヒアリングに行った時は、質問することもこちらで考えるため、関連する文献や情報を調べて読み漁り、必死で勉強した記憶があります。その後もGISの処理や報告書作成のどれも大変で、上司・先輩、そして、今だから言えますがお客様の多大な手助けで何とか納品にたどり着きました。

——確かに聞き手の私も、新入社員の上村さんが猛烈に働いていた記憶があります(笑)。7年目の今はいかがですか？

そうですね、徐々に自分の中の蓄積は増えてきている感じです。このお仕事は大抵が1年間を一つの区切りとしますし、やはり何年かやらないと見えてこないしできるようにならない事が多いように思います。今でも業務時間のやりくりが一番大変と感じています。現地調査に行って、その結果整理もやりつつ、他の業務の進め方を考えたり、提案事項を考えたりすると、時間が全然足りない。本当はそれぞれの業務

にじっくり時間をかけて、どうすれば良いか考えたり、提案してみたいことがあるけれど、なかなか思うように時間をつくれな。それが一番やきもきます。ただ、最近は作業を切り分けて他の方をお願いしたりする等、業務のマネジメントが少し上手くなってきたのか、1つの業務に余裕をもって取り組めるようになってきた気がします。まだまだですけど。

——そんな中で、思い出深いお仕事はありましたか？

一番思い出深いのは京都市の環境学習施設「さすてな京都」に併設されたビオトープに関連する業務ですね。自身の業務も含めると2016年から始めて現在も続いており、かれこれ5年は関わらせていただいている業務です。

はじめはその地域ですでに無くなった湿地(横大路沼)の環境をイメージしたビオトープを作るために、埋土種子から今は見られなくなった横大路沼の植物を復活させるという業務でした。その後、実際にビオトープが完成して復活させた植物を移植し、今はその管理・モニタリングに関わっています。また復活させた植物やビオトープを利用し、近隣の小学校や環境学習施設での環境学習にも協力しています。

試行錯誤とお客様への提案を繰り返してここまで来た気がしますね。提案したことを受け入れて実行させてくださる、業務の担当者にも恵まれていたとも思います。

一つの仕事から派生して様々な仕事に広がっていった体験は滅多にありませんし、基本的に1年間で終わるか、長くても2年くらいで終わる業務が多い中、5年以上も形を変えつつ継続させていただいており、思い入れのある仕事ですね。

——なるほど！面白いですね。

そうなんです。自分が知らない生きものや概念、技術とかは、業務を進める上で必ず出てきますが、それらの存在を知って学べることはとても面白いです。学び続けられる所がコンサルタント業の魅力ですね。また、お客様に「また来年度も業務をよろしく」と言ってもらえた時はとても嬉しく、やりがいを感じますね。

——上村さんは知的好奇心が旺盛で、いつも忙しそうに動き回っているイメージがありますが、最近ご家庭を持たれて、ちゃんとプライベートが充実しているのか心配する声も社内からは上がっていますが（笑）。

忙しい毎日ですけど、大丈夫です。休みの日は専ら妻と遊んでいます（笑）。コロナ禍の前はよく2人でカフェに行ったり、雑貨屋を回ったりしていました。最近は気軽に出かけられないんですが、実は最近マイホームを購入しまして…今は家の中をどうしたいかを話しながら、ネット上で欲しい家具を探したり、実際に購入して配置してまたどうするか考えたり、そんなことを楽しんでいます。

——今後上村さんが目指していきたい方向性や、やってみたいことはありますか？

はい、コンサルって基本裏方の仕事だと思いますが、一般の人にちいかんを身近に感じてもらえるようになると良いなと思っています。「ああ、ちいかんって生きものの専門家の会社でしょ？」ってみんな知っている感じで（笑）。もっともっとこういう面白い会社があって、面白い社員が働いていることを社会のみなさんに知ってほしい！

それとは別に、私個人としてはグリーンインフラとかEco-DRR（生態系を活用した防災・減災）とか、自然の機能を上手く使って安全で豊かな社会・暮らしを作っていくような仕事にぜひ関わってみたいと思っています。

——ちいかんは今、調査技術や生きものの知識を土台に色々な仕事にチャレンジしようとしていますよね？

はい、そこは私も望んでいるところで、もっと色々な業界の方と一緒に仕事ができればと思っています。例えば街な

かの緑地やビオトープなんかに、「ちいかんが生きものに配慮してプロデュースしました」みたいなものができる、いいですね。そのためには私達も造園や設計の視点が必要だし、知識を蓄えながら、造園や設計の業界の方とのつながりも作っていききたい。学ぶこと、やることは常にたくさんあると感じています。

——ではそういった仕事をする上で大切にしている考え方や言葉があれば教えていただけませんか？

「人は人、自分は自分」ですね。これは本来の意味とは違って「人はそれぞれ思いも立場も異なるから、それぞれの意思をまず尊重する」と自分の中で捉えています。



座右の銘。「上手く書けなかった」（本人談）

業務でも大切にしている、自分の信念や想いは持ちつつも、まずはお客様の立場と想いを聞き出し、そこを擦り合わせながら業務の方向性を決めていっていますね。

お客様以外に利害関係者がいるときも、その方々の想いは理解し、尊重して業務を進めたいと考えています。

実は、こういう「座右の銘」的なものは考えたこともなかったのですが、ちいかんの社長面接で「座右の銘は何かある？」と聞かれたときに、自分の人生を振り返ってこの言葉と考えが自然に出てきたんです。それ以来は、これを座右の銘にしています。

——マイペースだけで他者に優しく周囲の意見も大切に、とても上村さんらしい言葉だと思います。この業界、もしくはちいかんで働くことを目指す人に、アドバイスがあれば聞かせてください。

生きもの、自然好きな人が目指すことが多い業界、会社であるとは思いますが、ただ自然を調査するのではなく、自然に関わるお客様の「困りごと」を解決するのが仕事なので、「生きもの」一辺倒ではなく、様々な利害や思いを汲み取り、最善策を探ること、「生きもの」を通じて社会をより良くする仕事」なのだというを常に頭に置いておくことが大切なのかなと思います。

——では最後に、恒例ですが、上村さんが一番心躍る「生きもの」を一種挙げて、思いの丈をぶつけてください。

スゲ属の植物が好きなんです。一見地味で同定も難しくとつつきにくいんですが、花序がどれも面白い形をしていて、その造形に心惹かれます。調査で知らないスゲ属を見つけると、同定で苦労することもあります…。

身近で見ることができる種であれば「アゼスゲ」が好きです



アゼスゲ
Carex thunbergii
(カヤツリグサ科 スゲ属)

ね。さわやかな黄緑色の果胞とこげ茶色の鱗片のコントラストがとても綺麗だと感じます。マット状に広がって一面に開花しているのは壮観です。

——ありがとうございました。「団地」愛好家という一面についてもお話をお聞きしたかったのですが、今回はこのへんで（笑）。

はい、是非他の機会で！ありがとうございました。

取材日記

「ちいかんで働く人達」にスポットを当てたインタビュー企画も第4弾となりました。今回は大阪支社生物多様性推進室のホープ、上村さんです。お話を聞いていてもしみじみと伝わってくる誠実さと、自然環境への前向きな思いが、なんだか頼もしい気持ちにさせてくれる、とても「ちいかんらしさ」が溢れるインタビューでした。色々な先生に導かれて今の自分がある、という上村さん。人との出会いというのは、とても不思議で大切なものですね。これからの社会に必要なグリーンインフラのお話や、「団地マニア」を自称する面白いお話も、ぜひ次の機会にじっくりお聞きしたいです。次号もお楽しみに！当社採用ページ内「働く仲間を知る」には過去のインタビューも掲載しています。こちらもご覧ください。

企画、取材：管理部 森田 哲朗



びっくり

目からウロ子ちゃん

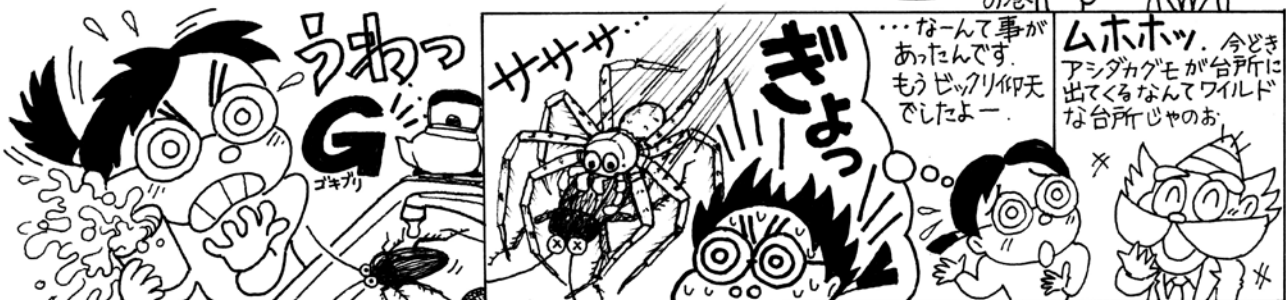
蜘蛛の糸

目唐
ウロ子
ちゃん

エヘヘ...

ムホホ...

知っ高
プリプリ
博士



(要注意)
(「台アラクモ等外果種」)
毒性強いクモ侵入例有り

参考文献: 子供の科学「おどろきのクモの世界」新海栄一 新海 明 誠文堂新光社 監修: 宮畑貴之(地域環境計画)
「クモのひみつ」 栗林慧 あかね書房 イラスト: 飯塚要



皆様はどのくらい植物の名前をご存知ですか？多くの方がまず思い浮かべるのは、小さな子でも花を描けるチューリップ、タンポポ、ひまわりなど、あるいは庭をお持ちの方ならサルビア、クリスマスローズ、クレマチス、ピオラなど、きれいな花を咲かせる植物の名前が出るのではないのでしょうか。一般的に植物の名前を思いだそうとすると、花を思い浮かべて、その姿から名前はなんだったかと、記憶を辿ろうとすることが多いのではないかと思います。

私たち植物を専門とする技術者も、主に花が咲いている時期に森や山、原っぱに入り、植物を探して名前を調べます。しかし実際のフィールドを見渡すと、意外と花が咲いている植物が多くないことに気がきます。そういう時は、花以外の植物の部位・器官を見て、植物の名前を調べます。私たち調査員は、現場を歩くとき、その手がかりを見逃さないよう、様々なものに目を凝らし、気を配ります。

まずはよく目に入る葉っぱから。葉っぱは花と同じくらい種によって形が違いますが、大体緑色なので、注意しないとその違いに気づきにくいかもしれません。葉っぱの違いとしては、葉の形、



ある日のフィールド・ノートから

花以外から見る
植物の色々な調べ方

大きさ、葉の縁がギザギザ（鋸歯）か、なめらか（全縁）か、毛が生えているか、葉っぱが茎や枝からどのように出ているか等、覚えきれない程の分類点で種類を判別します。似ている葉っぱが並んでいても同じ種とは限らないのが難しい所で、例えば在来種のネズミモチと外来種のトウネズミモチは、葉っぱの形はほとんど同じですが、葉の厚さと葉脈が日にかざして透けるか、透けないかで区別されるため、油断をしているとつい見逃してしまいます。

葉っぱが見えない程高い位置にある木の場合は、双眼鏡で頑張って見ることもありますが、逆に下の方から判断材料を探したりします。まずは樹皮。皮の割れ（皮目）が縦に入っているか、横に入っているか、剥がれているか、すべすべか等の情報から、どのような種であるかを絞っていき、さらに地面をみて、落ちている枯れ葉の中から、その木に当てはまるものを選び、そこ

写真右

在来種ネズミモチ（上）

外来種トウネズミモチ（下）

写真左

いろいろな種類の落ち葉。木の種類を知る重要な手がかりになることも。

から名前を調べてみたりします。他にはドングリのような植物の実が落ちていたりもあるので、植物を探す上では、地面に目を凝らすことも重要です。

視覚だけではなく、時には匂い、味を見る場合も。匂いで言えば、例えばクスノキ科の葉っぱは、ちぎるとツーンとした特有の香り、カバノキ科のミズメは枝や幹の皮を剥くと湿布（サリチル酸メチル）の匂い、ヘクソカズラ（屁糞葛）やくサギ（臭木）はその名の通りの匂いがします。味では、タデ科に属するヤナギタデは葉を噛むと辛みを感じることから、調査中に疑わしい場合は、口に含んだりして調べることもあります。驚くかもしれませんが、実はこのヤナギタデは鮎の塩焼きに添えられるタデ酢の原料であり食べられるため、実は理にかなった探し方だったりします。

このように花以外にも植物を特徴づけるものは数多くあり、私たちはそれらの手がかりを逃がさないように、山や森に入って調査をしています。これをご覧になる皆様も少しばかり、植物の花以外の姿にも目を向けてみてはいかがでしょうか。

（技術本部 自然環境研究部 石田 敏）

News Letter No. 50 2021 年 11 月

【発行】……………株式会社 地域環境計画

● 発行人……………高塚 敏

● 編集……………中山香代子・釣谷佳子・岡崎康代

・永沢敦子・渡邊由佳・亀井光子

素朴な疑問やご感想などお寄せください。お待ちしております。E-mail: nl-info@chiikan.co.jp

「チーム・オベリベリ」という不思議な名に惹かれ、厚さ5cmほどもある単行本をめくりました。明治前期に新天地での成功を夢見て会社を組織し、広大な十勝野へ入植した晩成社の物語が、1人の女性の視点で描かれていました。陸路も無く、他との往来も情報の入手も舟運が頼りという、想像できないような暮らしでの手探りの営農。苦難の日々を重ねた先人達がついて十勝は「日本の食料庫」と呼ばれる畑作地帯になりました。40周年の節目の時、当社を創り育てた方々、時の移ろい、会社の未来へも想いを馳せながら読み終わりました。（釣谷佳子）

株式会社
地域環境
計画
生きものと共生する
地域づくり人づくり
ちいかん

■ 本社 ■ 技術本部 ■ 企画営業本部

自然環境研究部
環境共生推進部

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDSビル

TEL : 03-5450-3700

<https://www.chiikan.co.jp>

■ 北海道支社 TEL: 011-717-8001 ■ 大阪支社 TEL: 072-684-3182

■ 東北支社 及び 野生生物管理部 TEL: 022-727-5223 ■ 中四国支社 TEL: 084-973-3733

■ 名古屋支社 TEL: 052-760-2822 ■ 九州支社 TEL: 092-833-5270

運営サイト

鳥獣被害対策商品の専門店

鳥獣被害対策.com <https://www.choujuhigai.com>

屋外防犯用品の販売サイト

Fieldsaver.com <https://field-saver.com>

